本レジュメは、発表資料として提出したバージョンにおいて、用例や文献の漏れが多くあったために、学会の許可を得て、加筆・修正の上公開するものです。修正部分は赤字で示します。

漢字字体と慣用音―「萌」の字音の変遷を例に―

東京大学大学院博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC
大島英之　（a4.ohshima@gmail.com）

1. はじめに

1-1. 問題の所在

「萌」という字は、常用漢字には含まれていないが、「萌芽」という熟語の語形として、ホウという音読みが流通していると言えよう。しかし、中古音では明母 [m (> m^b)]に属する字であるため、日本漢字音の音形としては、マ行ないしバ行が期待される。またその韻母は、梗摂二等平声の耕韻 [ɐŋ][1]に属し、歯音字以外では一般にア段＋ウ（呉音の一部はイ段＋ヤウ）が期待される。ただし、漢和辞典によって、呉音をミャウとするものとマウとするもの、漢音をマウとするものとバウとするものとが分かれており、どの認定が妥当なのかを、実例をもとに検証する必要がある。また、現代語の「ホウ」の音は、声母の対応という点で例外的であり、多くの漢和辞典が共通して「慣用音」と認めるところとなっているが、いつ頃から用いられ、どのようにして生じたのかは明らかでない。そこで、近世から近代にかけての字音の変化と、その原因について検証が必要であると考える。

1-2. 本発表の要旨

本発表は、「萌」の字について、中古中世（とくに鎌倉以前）における古訓点・古辞書にみえる実例に基づく帰納的な字音認定を行うとともに、現代に至るまでの諸資料に見られる音形を確認し、字音の変遷とその背景を追究するものである。

3 節では、呉音・漢音ともに音形はマウが一般的であること、室町時代には「萠」の「朋」からの類推で生じたと考えられるホウ・ボウの音も用いられるようになることを示す。4 節では、近世以後は漢籍でモウ（マウ）が使用されなくなり、さらに近代では一般の漢語におけるボウの使用も減じることを示す。

5 節では、近世に「モウ（マウ）」が使用されなくなる背景について、特に常用字でない場合、明母字の漢音を一律にバ行音とする動きが近世初期に確認されることとの関連を指摘する。また、近代に「ボウ」が使用されなくなることについては、近代に至るまで「萠」の字体が使い続けられたことで、同じくボウ・ホウ二音からホウに一元化した「朋」と軌を一にする変化を遂げたものと解釈する。

以下、引用に際しては、下部を「明」に作る「萌」と、下部を「朋」に作る「萠」との二種の字体を区別して示し、字種として言及する際には混乱を避けるため《萌》と表記する。二種の字体の区別は、左下が《月》と書かれるか《日》と書かれるかを基準とし、「月」「⺼」「⺼」などの違いは捨象して「萠」で示す。また下部を《明》の異体字である「明」「明」に作る字体は、それぞれ「艹/明」「蔀」で示す。なお、《萌》以外の字については、原則として通行の字体に改めて引用し、《　》も用いない。

また、引用文献の使用テキストや、使用した索引類については、稿末に示し、本文中では省略したところがある。用例の所在については、本稿末尾に示したリンク先を参照されたい。

---

[1] 推定音価は平山（2022）表 15 の音価表による。漢音の母胎となる長安方言（秦音）では、重韻をなす庚韻二等[aŋ]と合流していたと考えられる。なお、このほか曾摂一等の登韻[əŋ]の音も有するが、これは特殊音と思われる。詳細については 2-1 を参照されたい。

2. 問題点の整理

2-1. 中古音の音注の整理

まず、論の前提となる、中古音資料における《萌》字の音注を整理しておく。

『広韻』では、下平十三・耕韻の甍小韻（莫耕切）の四番目に《萌》が見え、義注は「萌牙」とのみある。先行する『切韻』系韻書（『切三（S. 2071）』『王二（内府本刊謬補缺切韻）』『王三（全本王仁昫刊謬補缺切韻）』）でも、反切は同じである。

高山寺本『篆隷万象名義』には「麦耕反、萠芽也、本也」とあり、反切上字は『切韻』系韻書と異なるが、「莫」「麦」ともに明母字で変わりは無い。『宋本玉篇』には「麦耕切、始也、説文曰草木芽也」とあり、注解は異なるものの反切は同じである。

『一切経音義』のうち、代表的なものとされる『玄応音義』『慧琳音義』の反切も、ほとんどは「麦耕」か「莫耕」である[2]。なお、『慧琳音義』に一例「麦彭反」という反切が確認される〔巻八十・大唐内典録第十巻「毓萌」〕。しかし「彭」は耕韻と重韻をなす庚韻二等字であり、この二韻は『慧琳音義』の反映する秦音においては同音に帰していたとみられるから、問題とならない。

以上から、中古音は耕韻明母であることが確認される。

一方で、『広韻』甍小韻の七字目である「蔧」には「爾雅云、存存蔧蔧、在也。又莫登切。本亦作萌。又作蔧」という義注がある。「又莫登切」という反切が示す通り、「蔧」は下平十七・登韻の瞢小韻（武登切）にも掲出されており、「爾雅云、存存蔧蔧、在也」という同内容の義注がある。現行の『爾雅』テキストには「存存萌萌，在也〈郭璞注：萌萌，未見所出〉」〔釈訓三〕とあり、抱経堂本『経典釈文』所収『爾雅音義』では「萌萌」について「郭武耕反、施亡[3]朋反、字或作蔧」〔中 14 ウ〕という二家（郭氏・施氏）の反切が示されており、登韻の「蔧」はこの施氏音が根拠となっているものと思われる。『集韻』では登韻に「萌蔧」を掲出し、義注に「爾雅、萌萌、在也。或作蔧。俗作蔧、非是」とある[4]。登韻は、日本漢字音ではオ段＋ウで反映されるため、演繹的には「モウ」や「ボウ」が期待されることとなる。

しかし、〈芽〉や〈きざす〉といった意味を表すのに用いられた、一般的な字音は、（規範的には）梗摂二等の耕韻のみであったと考えられる。実際、平安時代の日本の字書・音義類に、登韻の音を反映するものは、管見の限り見られなかった。

・艹/明　莫耕反。芒也。本也。始也。須介。〔天治本新撰字鏡〕
・群艹/明　莫耕反。慈恩云、芽也始也。（以下略）〔醍醐寺本法華経釈文〕
・萌萠　亠甍（以下略）〔観智院本類聚名義抄〕
・萠　キサス、莫耕反〔前田本色葉字類抄〕

---

[2] 玄応音義については周法高（1968）、慧琳音義については上田（1987）を利用した。
[3] 通志堂本では「云」とある。
[4] この他『集韻』では庚韻（三等）の明小韻（眉兵切）にも《萌》が見え、義注は「蕨萌、艸名」とある。しかし「蕨萌」は『集韻』以外に用例が見えないこともあり、本論には関与しない音類と考える。

2-2. 漢和辞典における呉音・漢音の整理

続いて、代表的ないし比較的近年に発売された漢和辞典における、《萌》の日本漢字音の取り扱いについて調査した（表 1）。なお耕韻以外の音類を反映する音形は省略した。

表 1　漢和辞典における《萌》の日本漢字音の取り扱い

書名	出版社	刊年	呉音	漢音	慣用音
漢和大字典	三省堂	1903	ミヤウ	バウ	
大字典	啓成社	1917	ミヤウ	バウ	
大漢和辞典 九巻	大修館書店	1958	ミヤウ	マウ	ハウ
角川新字源	角川書店	1968		ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)
学研漢和大字典	学研	1978	ミョウ(ミヤウ)	モウ(マウ)	ボウ(バウ)・ホウ(ハウ)
角川大字源	角川書店	1992		ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)
現代漢語例解辞典 2 版	小学館	2001	モウ(マウ)	ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)
新選漢和辞典 8 版	小学館	2011	モウ(マウ)	ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)
新漢語林 2 版	大修館書店	2011	ミョウ(ミヤウ)	モウ(マウ)	ボウ(バウ)・ホウ(ハウ)
新明解現代漢和辞典	三省堂	2012	モウ(マウ)	ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)
岩波新漢語辞典 3 版	岩波書店	2014		モウ(マウ)	ホウ(ハウ)
五十音引き漢和辞典 2 版	三省堂	2014	モウ(マウ)	ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)
全訳漢辞海 4 版	三省堂	2016	モウ(マウ)	ボウ(バウ)	ホウ(ハウ)
角川新字源改訂新版	角川書店	2017		ボウ(バウ)・モウ(マウ)	ホウ
漢字源改訂 6 版	学研	2018	ミョウ(ミヤウ)	モウ(マウ)	ボウ(バウ)・ホウ(ハウ)

現代通行音の「ホウ」を慣用音とするのは、全ての辞書に共通するところであるが、呉音・漢音の認定在り方は一定しない。呉音・漢音双方の音形を掲げる辞書において、これらを整理すると、①～③となる。

①呉音ミャウ　漢音バウ　……三省堂漢和大字典、大字典など
②呉音ミャウ　漢音マウ　……大漢和辞典、学研漢和大字典、新漢語林、漢字源など
③呉音マウ　　漢音バウ　……現代漢語例解辞典、五十音引き漢和辞典、漢辞海など

①は、文雄『磨光韻鏡』や大矢透『隋唐音図』といった、等韻学に基づいた演繹的な字音認定の結果と一致する[5]。②は、撥音韻尾を有する明母字では漢音もマ行で現れるという有坂（1940）の研究を踏まえたものと思われる。③は、日本語資料に実際に確認できる音形を積極的に採用する方針の辞典類に、多く共通して見られる。ただし、同様の方針が凡例に示される『角川新字源 改訂新版』は、漢音にマウ・バウ二音を認め、呉音形は掲げていない。

以上を踏まえ、3 節・4 節で、日本語資料中に見られる音形を確認する。

[5] 太田全斎『漢呉音図』は、耕韻開口の呉音を一律に「エ段＋イ」としており異質である。

3. 中古・中世における《萌》の字音

3-1. 中古中世の呉音資料における《萌》の字音

まず、中古中世の仏典・音義類から、《萌》の呉音形を確認する。

『妙法蓮華経』には、人民を意味する「群萌」という熟語が二例見える（巻三・化城喩品第七，巻六・法師功徳品第十九）。そこで代表的な法華経音義をみると、「崩（去） 无香反」〔九条家本法華経音〕、「崩（上） マウ／无（去）香（上）」〔保延本法華経単字〕、「萌（上） キサス」〔法華経音訓（至徳版）〕のように、音形はマウ、声調は上～去声で現れる。仮名書き法華経でも、足利本・妙一記念館本ともに「くんまう」であり、妙一本には「群（去濁）萌（上）」〔影印本 p.1057〕の差声も確認される。

観智院本『類聚名義抄』には、「萌萠 （音）ヒ 甍 キサス（○上濁平） モユ（平上） （和）禾 マウ（平上）」〔僧上 19 ウ〕とある。「マウ」には上昇調を示す墨声点が施されており、去声であったと考えられる。

他の仏書の例としては、高山寺本『大日経疏』に「善萌」〔巻二 124〕「萌動」〔巻二 805〕といった墨筆の加点例がある。築島（1986）によれば、墨筆には二種あるようであるが、「ウ」の仮名字体から判断するに長治元年（1104）の点かと思われる。また、高山寺本『新訳華厳経』寛喜元年（1229）点にも「群（去濁）萌（上）」〔巻二十四〕・「萌（墨上）」〔巻二十八〕とあるようである（榎木 1998:188, 190）。

また、親鸞遺文では、建長七年（1255）の書写と伝えられる法雲寺本『尊号真像銘文』（略本）に「群（去濁）崩（上）」〔影印本一〇三〕とある[6]。正嘉二年（1258）の書写奥書を持つ専修寺本（広本）にも「クンマウ」の仮名音注が見える。訓点資料である板東本『教行信証』には「羣萌」3 例「群萌」2 例あり、いずれも《群》に去声の濁声点、《萌》に上声の単声点が施されている[7][8]。

以上から、中古中世における《萌》の呉音形は、基本的にはマウであり、中古音の平声に対して、仄声で実現していたことが確認される。

なお、小倉（1995）によれば、山田本甲・承応版などの法華経音義では、《萌》に対して「ホウ」ないし「ボウ」が現れるようであるようであるが、これらは近世初期のものとされる。また、室町末の書写とされる龍谷大学図書館蔵『浄土三部経音義』にも「崩　キサス／モユ」〔16 オ〕が確認されるが、本音義には「粗雑ないし不用意な仮名音注が散見され、また漢音形の混入も多い」という指摘がある（石山 2021: 55）。天正十八年（1590）の序文を有する珠光編『浄土三部経音義』には、「萌　バウ／マウ音／キザス　モユル」〔影印本 p.78〕とあり、「～音」は呉音形を表すとみられる（石山 2021: 50）ことから、中世末にも呉音がマウと意識されていたことが分かる。

---

[6] 外形上は「一」のような線点であるが、本資料においては濁音を示す。佐々木（2012）によれば、この線点は、字音直読資料ないし漢字片仮名交じり文において親鸞が使用したという。

[7] ただし、5 例全てにおいて、濁声点は線点「一」であり、また単声点も小ぶりのものである。佐々木（2012）によれば、板東本『教行信証』には少なくとも 3 種の加点形式があり、ここに示したような形式の点は、親鸞とは別人による後筆の疑いがあるという。

[8] このほか、『日本古典文学大系 82 親鸞集 日蓮集』所収「親鸞聖人御消息集（善性本）」に「崩友」〔p.179〕という例が見える。「朋友」の誤りと思われるが、影印等を確認することができなかったため、指摘にとどめる。

3-2. 中古中世の漢音資料における《萌》の字音

続いて、中古中世の漢音資料から、《萌》の漢音形を確認する。

《萌》の漢音形に関する言及は、撥音韻尾を有する明母・泥母字では漢音にマ・ナ行が現れることを論じた有坂（1940）に既に見られる。その主要な論拠となっている正倉院本『蒙求』の仮名音注に、「門（モン）・孟（マウ）・命（メイ）・明（メイ）・鳴（メイ）」と共に「萌（マウ）」が挙げられている。

これに対し、築島（1967）は、興福寺本『大慈恩寺三蔵法師伝』承徳点では「鼻音で終る字音の中でも、明母にバ行表記のものが存するのであり、……必ずしも有坂博士の述べられたやうに規則的にはなつてゐない。この點尚考究する餘地がありさうである。」（築島 1967: 229）として、「妄（バウ）・罔（バウ）・網（バウ）・挽（ベン）・冕（ベン）・晩（バン）・敏（ビン）」と共に「萠（バウ）」が挙げられている[9]。

以上より、マウ・バウともに平安鎌倉時代の漢音資料に実例があることは認められるが、どちらの音形がより一般的であったか（もしくは両形とも一般的であったか）を考えるにあたっては、多くの資料から用例を集めた上、帰納的に判断する必要がある。そこで、中世以前の訓点本が存在し、かつ、漢音の使用が期待される資料として、以下の資料を選定し、用例を検索した[10]。得られた用例のうち、14 世紀以前と思われる仮名音注・声点加点例を、表 2 に年代順に示す。

・漢籍

【経部】周易（王弼注），尚書（孔安国伝），毛詩鄭箋，礼記（鄭玄注），春秋経伝集解，古文孝経（孔安国伝），論語集解，孟子（趙岐注），千字文（李暹注）／【史部】史記，漢書，後漢書，貞観政要／【子部】帝範，臣軌，六韜，黄石公三略，五行大義，群書治要，蒙求（古注・徐注），遊仙窟，老子道徳経（河上公注），荘子（郭象注）／【集部】白氏文集，文選

・仏書

【仏典】孔雀経，理趣経／【伝記類】大慈恩寺三蔵法師伝

・日本漢文

【空海関連資料】文鏡秘府論，三教指帰，遍照発揮性霊集，秘密曼荼羅十住心論，秘蔵宝鑰／【詩文集】和漢朗詠集，新撰朗詠集／【文例集】本朝文粋／【古往来】和泉往来，高山寺本古往来／【軍記・説話】将門記，注好選，探要法華験記／【古文書】尾張国解文

・漢籍引用文献

【和製類書】明文抄，玉秘函抄，管蠡抄，金句集／【古辞書】文明本節用集（態芸門所収漢籍引用部分）／【古注釈】源氏奥入

※表 2 の凡例

・識語のない文献の加点年代については、小林（1967: 161-196）、築島（2008）、佐々木（2009）等に従った。

---

[9] このうち「妄」「罔」「網」「晩」は軽唇音化を起こした微母字であるため、明母字とは事情を異にする。しかし、「冕」「敏」などは他の漢音資料に徴してもバ行が一般的であり、例外となる。一方で「曼」のように、微母であるにもかかわらず多くの資料に「マン」で現れる字もある。

[10] 用例検索にあたっては、漢籍・仏書・空海関連資料については、「中央研究院漢籍電子文献資料庫」と「大蔵経データベース 2018 版」を主に用い、「中国基本古籍庫」を補助的に活用した。その他の資料については、本稿末尾の「索引類」に記した資料の他、OCR を活用して検索した。

・排列の便宜上、院政後期は 1150 年、院政末期は 1180 年、鎌倉初期は 1210 年、鎌倉中期は 1260 年、鎌倉後期は 1300 年、鎌倉末期は 1330 年、南北朝期は 1360 年とした。
・14 世紀以前と思われるが、加点時の判断が難しい例については、便宜上最後にまとめて示した。
・先論によって室町以後の別筆とされているものや、そうである蓋然性が高いと判断した例は除いたが、判断に迷う例は含めたものもある。
・合点は「〲」で、改行は「／」で示した。
・「字体」列には、《萌》の字体（萌、萌、艹/明で区別）を、写真などによって確認できたもののみ示し、活字に拠ったものは「〇か」や「-」とした。
・「出典」列には、調査資料名を略記し、インターネット上で公開されている画像を利用した場合は、ページの URL のリンクを挿入した。
・用例の所在については、本稿末尾のリンク先（Google スプレッドシート）を参照されたい。

表 2　日本漢音資料における「萌」の漢字音

字体	仮名音注	声点	漢語	資料名	出典
萌	マウ	平	逢萌	長承本『蒙求』平安中期朱点	汲古書院影印本・e 国宝
萌		平	萌蔕	興福寺本『慈恩伝』承徳三年(1099)墨点	築島(1965)所収訳文・影印
萌	ハウ		萌蔕	興福寺本『慈恩伝』承徳三年(1099)朱点	築島(1965)所収訳文・影印
萌	ハウ	平	黎萌	興福寺本『慈恩伝』承徳三年(1099)墨点	築島(1965)所収訳文・影印
萌	ハの濁点		黎萌	興福寺本『慈恩伝』承徳三年(1099)朱点	築島(1965)所収訳文・影印
萌	マウ	去	萌兆	高山寺本『十住心論』天永二年(1111)朱点	高山寺古訓点資料第四
萌		去	善萌	高山寺本『十住心論』天永二年(1111)朱点	高山寺古訓点資料第四
萌	マウ		逢萌	長承本『蒙求』長承(1132-5)頃墨点	汲古書院影印本・e 国宝
萌		平	萌兆	大谷大学本『三教指帰注集』長承二年(1133)点	大谷大学複製本
萌	マウ		萌蘭	書陵部本『文鏡秘府論』保延四年(1138)朱点	東方文化叢書複製本
萌	マウ	平	逢萌	故宮博物館本『蒙求』院政後期点	蒙求古註集成
萌か	マウ		萌兆	天理本『三教指帰』久寿二年(1155)点	太田(1989)の翻刻
萌	マウ	去	萌動	国語研究室本『秘蔵宝鑰』仁安二年(1167)点	国語研究室資料叢書
萌か	マウ		萌動	西教寺本『秘蔵宝鑰』院政末期点	曾田・岸岡(1970)の翻刻
萌	マウ		逢萌	正倉院本『蒙求』鎌倉初期点	南都秘极複製本
萌	マウ	平	萌黎	高山寺本『史記』周本紀鎌倉初期点	高山寺古訓点資料第一
萌	マウ		萌兆	光明院本『三教指帰』鎌倉初期写本朱点	高野山アーカイブ
萌	ホウ(右) マウ(左)	去	萌兆	龍門文庫本『三教指帰』鎌倉初期写同時期頃点	阪本龍門文庫電子画像集
萌	ハウ		萌蔕	人文研本『慈恩伝』貞応二年(1223)墨点	東方學デジタル圖書館
萌	マウ		萌草	大東急本『白氏文集』巻四嘉禎四年(1238)点	勉誠社影印本
萌		平	萌幼	書陵部本『群書治要』巻七（礼記）康元二年(1257)点	漢籍集覧
萌	マウ	平	民萌	書陵部本『群書治要』巻三十三（晏子）	漢籍集覧

萠	マウ	平	萌生	書陵部本『群書治要』巻三十五（文子）	漢籍集覧
萠		平	萌生	書陵部本『群書治要』巻四十二（塩鉄論）	漢籍集覧
萠	マウ		萌	書陵部本『群書治要』巻四十五（崔寔政論）	漢籍集覧
萠		平	萌	書陵部本『群書治要』巻四十七（政要論）	漢籍集覧
萠		平	餘萌	久遠寺本『本朝文粋』鎌倉中期点	汲古書院影印本
萠	マウ	平	萌芽	久遠寺本『本朝文粋』鎌倉中期点	汲古書院影印本
++/明	マウ		萌草	天理本『白氏文集』巻四正応二年(1289)写本	天理図書館善本叢書
萠	マウ		萌蘭	成簀堂文庫本『文鏡秘府論』鎌倉後期点	古典保存会複製本
萠	ホウ(右) 〲マウ(左)		萌生	書陵部本『臣軌』鎌倉後期点	漢籍集覧
萠		平	萌	書陵部本『群書治要』巻三十（晋書）嘉元四年(1306)点	漢籍集覧
-	マウ		萌	金沢文庫本『管蠡抄』徳治三年(1308)写本	納富(1973)の翻刻
-		平	未萌	金沢文庫本『管蠡抄』徳治三年(1308)写本	納富(1973)の翻刻
-	マウ		萌	知恩院本『三略』正和二年(1313)点	小林(1967: 935)の挙例
-	マウ	平	逢萌	天理図書館蔵『蒙求』道順書写本鎌倉末期点	佐々木(2009)資料編
-	マウ	平	逢萌	天理図書館蔵『蒙求』康永四年(1345)点	佐々木(2009)資料編
萠		平	萌芽	梅沢本『老子道徳経』応安六年(1373)写本	e 国宝
萠	マウ		未萌	梅沢本『老子道徳経』応安六年(1373)写本	e 国宝
萌	マウ	平	逢萌	国会本増註本『蒙求』応安七年(1374)刊本同年頃書き入れ（朱）	国会図書館デジタルコレクション
萠	マウ		萌蘖	書陵部本『孟子集註』弘和元年(1381)点	漢籍集覧
萠	マウ	平	萌芽	書陵部本『老子道徳経』至徳三年(1386)点	漢籍集覧
萠	マウ		未萌	書陵部本『老子道徳経』至徳三年(1386)点	漢籍集覧
萠	マウ		逢萌	大橋家本『源氏物語奥入』	複刻日本古典文学館複製
萌	マウ(右) 〲ホウ(左)	平	萌兆	穂久邇文庫本『五行大義』別筆	古典研究会叢書漢籍之部
萌	ホウ	平	萌芽	穂久邇文庫本『五行大義』別筆	古典研究会叢書漢籍之部
萌	ホウ		孳萌	穂久邇文庫本『五行大義』別筆	古典研究会叢書漢籍之部

表 2 から、音形はマウが大多数を占め、ハ（バ）ウは興福寺本・人文研本『大慈恩寺三蔵法師伝』以外に例を見出せなかった。また、声点は、空海関連資料に去声点が若干見られる[11]ものの、典型的な漢籍資料では平声点に限られる。よって、平安鎌倉時代においては、平声のマウが一般的な漢音形であったと推測される。またこのことから、単声点のみが差された例も、多くはマウを示したものと解される。

なお、ここで注目されるのが、龍門文庫本『三教指帰』、穂久邇文庫本『五行大義』、書陵部本『臣軌』

[11] 高山寺本『十住心論』巻二の「萠（マウ）（去）兆（テウ）（去濁）」〔1 オ〕「善萠（去）」〔3 ウ〕、国語研究室本『秘蔵宝鑰』の「萠（マウ）（去）動（平）」〔4 オ〕など。

などに「ホウ」という音形が見られることである。オ段長音の開合の混乱によるハ（バ）ウの合音形と解するには、時期が早すぎる上に、このような位相にある資料群に混乱例が現れることは想定しがたく、また諸資料に「モウ」が全く見えない点も説明できない。

室町時代の漢籍では、マウも依然として用いられ続けるが、マウ以外の音形も散見されるようになる。以下に、表 2 に示したものを含め、マウ以外の音形の例を挙げる。

○ホウ・ボウの例

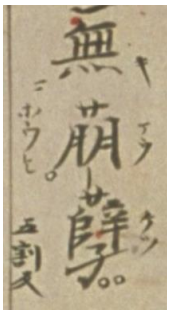
・『孟子』告子章句上「雨露之所潤、非無萌蘖之生焉」

萌（マウ）（平）-蘖（ケツ）（入濁）〔京都大学附属図書館所蔵『孟子』清原宣賢点〕（図 1[12]）

萌（マウ／ホウ）-蘖（ケツ）〔東洋文庫蔵有注本『孟子』室町後期写本〕

※書陵部蔵集註本、東洋文庫蔵無注本永禄十年写本などは「マウ」

図 1



・『六韜』龍韜・王翼第十八「主図安危、慮未萌」

未萌（ミホウ）〔陽明文庫本六韜天文写本〕

未-萌（ホウ）〔慶應大学蔵室町後期写本〕

未萌（ヒホウ）〔京都大学蔵業賢筆本〕（図 2[13]）

図 2

・『五行大義』序「靡究萌兆」

萌（マウ／ホウ）（平）-兆（テウ）（去）〔穂久邇文庫本巻一 11 行〕

・『五行大義』巻一・「揆然萌牙於物也」

萌（ホウ／キサス）（平）-牙（カス／キサス）（平）〔穂久邇文庫本巻一 141 行〕

・『五行大義』巻一・「萬物孳萌」

孳（シ）（平）-萌（ホウス）〔穂久邇文庫本 146 行〕

・『蒙求』「逢萌挂冠[14]」

蓬萌掛冠（ハフホウクワ）〔国会図書館蔵大永本〕（図 3[15]）[16]

逢萌掛冠（ホウボウクハ）〔東京大学附属図書館南葵文庫蔵天文四年写本〕

※龍谷大学本、京都大学蔵天正八年本、京都大学蔵徐注本などは「マウ」

図 3

・『三教指帰』巻上・「麻畝直性、亦未萌兆」

---

[12] https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00007927#?c=0&m=0&s=0&cv=383&r=0&xywh=1083%2C422%2C1905%2C588（2022 年 10 月 19 日最終閲覧）

[13] https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00007933#?c=0&m=0&s=0&cv=40&r=0&xywh=398%2C954%2C1067%2C330（2022 年 10 月 19 日最終閲覧）

[14] 「逢」は、『広韻』によれば、〈あう〉の意味では鍾韻（漢音はホウ）、姓氏としては江韻（漢音はハウ）であり、沢存堂本では後者の字体を「逢」として、「逢」と区別しているようである。『蒙求』諸本ではどちらの字体も見られる。字音についても、長承本では「ホウ」、正倉院本では「ハウ」とあり、古くから双方が用いられたようである。なお大永本の「蓬」は「逢」の誤字であろう。

[15] https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2544961/4（2022 年 10 月 19 日最終閲覧）

[16] 佐々木（2009）資料編によれば、「モウ」という角筆点が別に認められるようである。

萌（去？）兆（去？）〔龍門文庫本三教指帰鎌倉初期写本同時期頃点か〕※マウは後筆か。

・『管蠡抄』「整政責躬、杜漸防萌、則凶妖消滅、禍除福湊矣」
崩〔国会図書館本室町末期写本〕※ホの左上の二点は濁点か。

〇ハウ・バウの例

・『孟子』告子章句上「雨露之所潤、非無萌蘖之生焉」
萌（平）-蘖〔龍谷大学蔵『孟子集註大全』室町末期写本〕

・『後漢書』丁鴻伝「若勑政責躬、杜漸防萌、則凶妖銷滅、害除福湊矣」
（朱）萌〔文明本節用集〕

以上の例は、いずれも〈きざす〉〈めばえる〉〈民（氓に通じる用法）〉といった意味であって、中古音としては耕韻の字義と対応する。『広韻』において見出し字としては掲出されていない〈在る〉の字義を持つ登韻の音が敢えて持ち出される理由は、想定しがたい。

また、上に挙げた資料にはオ段長音の開合の混乱状況を示すものもあるが、「マウ」が依然として用いられるにも拘わらず、大永本『蒙求』角筆点（注 16）を除き「モウ」が見えないことは、音声上の混乱だけでは説明しがたい。

ここで注目したいのが、《萌》の字体である。表 2 や上の挙例における大多数は、下部を「朋」に作る「崩」である[17]。「朋」は平声登韻並母字で、呉音ボウ・漢音ホウである。そのため、《萌》字を、「朋」を声符とする形声字と誤認し、類推（いわゆる百姓読み）によってホウ・ボウという慣用音が散発的に生じ、またそれが伝承されることも、しばしばあったのではないかと考察する[18]。

また、上に挙げた資料の多くには、濁声点ないし濁点の使用が、義務的に施しているとは言いがたいものの、認められる。それにもかかわらず、《萌》に対する濁声点・濁点の加点例は多くない。積極的な証拠（例えば不濁点や清音注記）には欠けるが、「朋」の類推によるものとすれば、「ホウ」という清音形も既に生じていたのではないかと思われる。

もし《萌》の漢音として古くバウが一般的に用いられたとすると、漢籍に濁声点を加点することも多かったはずである。その場合、その濁声点を目にした後代の人が、朋（ボウ）という呉音形を持ち出すことには、（連声濁を起こす環境でない限りは）抵抗があったのではないかと想像される。しかし、既に見たように実際にはマウが一般的であり、単声点のみの加点も多かった。この事実も、一つの阻害要因が回避されたという点で、萌（ホウ）という音形が発生・定着するのに有利に働いたのではないかと思われる。

3-3. 中古中世の辞書・非漢文資料における《萌》の字音

前節までにおいて、平安鎌倉時代においては、呉音・漢音ともに「マウ」が多く、声調において対立があったことを確認した。しかし、一部の漢籍資料に「ハウ」や「ホウ」が確認され、また室町時代に降る

---

17 『大広益会玉篇』附録「分毫字様」に「明朋　上眉兵切清也、下薄登切党也」とあるように、日中問わず「明」と「朋」は混じやすかったようである。ただ、「崩」は『干禄字書』に見えず、「萌」の俗字や異体字として中国側の字書に示されることはなかったように見受けられる。

18 訓点資料に声符からの類推とみられる音が散見されることは、築島（1969: 432）などに指摘がある。

と「ホウ」が多くの資料に現れるようになることを確認した。

そこで、本節では、呉音漢音の区別に関する規範性が相対的に低いと思われる、古辞書や非漢文体の日本語文資料に見られる《萌》の字音を調査して整理する。

まず、中世の古辞書類を確認する。

『色葉字類抄』『下学集』『節用集』といった国語辞書には、《萌》を音読する語は確認されなかった。『日葡辞書』には一例、「**Fatbŏ.** ハッバゥ（発萌）. Vocori qizasu.（発り萌す）すなわち，Moye izzuru.（萌え出づる）草や麦などが生え出ること.」〔邦訳 212l〕があるが、「発萌」は中近世の文献における用例が見出せず、一般的な語ではなかったと推測される。声符からの類推は、口語では普通に用いられないような字で起こりやすいと考えられる（平山 1993: 137）が、《萌》字はこの条件を満たす字だったといえよう。なお『落葉集』には、「発崩（はつぼう）」〔本篇 4 オ〕「崩（ぼう）」〔小玉篇 15 オ〕とあって、開合が異なる[19]が、バウ・ボウ両形が他の資料に確認できるため、一方を誤りとは断じがたい。

続いて、漢字字書の類を確認する[20]。ただし、漢字字書の字音の規範性は資料によって異なると考えられ、たとえば『字鏡集』の仮名音注などは多分に人工的な性格を持つことが指摘されている（伊藤 2020）。実際、天文本・永正本・応永本といった諸本では、いずれも「薧同　蔥同」の注記とともに「ハウ」「ホウ」の二音のみを載せるが、「マウ」は見えない。2-1 に示したように、注記に見える「薧」は登韻の音を有するため、耕韻・登韻明母の反切から演繹的に導いたものと解釈することができる[21]。

『和玉篇』諸本では、次のように音形の揺れが激しい。ただ、「ハウ（バウ）」の音を単独で載せる字書が無い一方で、「ホウ」のみを載せる字書が多いことは注意される。

ハウ：音訓篇立

バウ：夢梅本

ホウ：音訓篇立、篇目次第、米沢本、玉篇要略集、龍門文庫本、玉篇略

マウ：音訓篇立、篇目次第、夢梅本、拾篇目集、松井本類字韻

また、『平他字類抄』を改変増補して成立した、イロハ引きによる平仄字書である、『色葉字平他』類の韻書では、一字に一音のみを示す例が多く、また龍門文庫本・明応十年本については、呉音・漢音・慣用音が豊富に認められ、当時の流通音を反映していると考えられる（大島 2022）。《萌》の字についてみると、次のように揺れている[22]。

ホウ：天正十六年本（キザス）

---

[19] この点について、『邦訳日葡辞書』の注には「‘萌（バウ）’は‘萠（ボウ）’が通用した」とあり、発表者の解釈にも通じるところがあるように思われるが、別字種として意識されていた、もしくは字音によって字体が書き分けられたというようにも読める。しかしその証拠には乏しく、やや不正確な説明と思われる。

[20] 岩崎本『字鏡』（世尊寺本）は艸部を欠くため、引用していない。

[21] ただし、例えば天文本の「明」には「メイ」「ヘイ」両音があるように、『字鏡集』諸本において撥音韻尾を有する明母・泥母字にマ・ナ行が現れないというわけではなさそうである。

[22] 明応十年本、祐徳稲荷神社本には見られなかった。

ボウ：天正十六年本（モユ）、龍門文庫本（キザス）、龍門文庫本（モユ）
マフ：新韻集（キザス）

最後に、非漢文資料を確認する。「日本古典文学大系データベース」・『新編日本古典文学全集』（Japan Knowledge）を利用して、《萌》字を検索し、「萌黄」などを除いて音読が期待される例のみを抽出したところ、中世以前の例としては次の 3 例が残った[23]。

①通憲モ才學アリ、心モサカシカリケレド、己(おの)ガ非ヲシリ、未萌(みぼう)ノ禍(わざはひ)ヲフセグマデノ智分(ちぶん)ヤカケタリケン。〔『神皇正統記』下「二条天皇」・旧大系 p.148〕
②與(ト)下義貞傾(ケ)二忠心(ヲ)一盡(ツクシテ)二正義(ヲ)一、爲二朝家(ノ)一輕(ンジテ)レ命(ヲ)、先(サイダツテ)二勾萌(コウマウニ)一奏(ス)上レ罰(セント)二尊氏(ヲ)一。〔『太平記』巻 14「新田足利確執奏状事」・旧大系二 p.47〕
③春雷(シユンライ)一タビ動ク時、蟄虫(チツチユウハウ)萌蘇(ソ)スル心地シテ、聖運(タチマチ)忽ニ開ケテ、功臣既ニ顯(アラハ)レヌト、人皆歡喜(クワンギ)ノ思(オモヒ)ヲナス。〔『太平記』巻 18「先帝潛幸芳野事」・旧大系二 p.230〕

以上の 3 例について、室町～近世初期にかけて書写された諸本を調査したところ、『神皇正統記』①は、寛永七年の校合奥書を有する青蓮院本に「未萌(ミマウ)」〔中四四ウ〕が見られたのみであった[24]。これに対し『太平記』②③には、表 3 に示すように、種々の語形が確認された[25]。

表 3　太平記諸本における《萌》の字音

	勾萌	萌蘇
ハウ	筑波大学本、南都本、教運本、日置本	
ホウ	西源院本、前田家本、神宮文庫本、梵舜本、京大本	神田本、神宮徴古館本、今川家本、米沢本、益田本、前田家本、梵舜本、教運本、野尻本、京大本、日置本
ボウ	玄玖本、米沢本	天正本
マウ	神宮徴古館本、簗田本	西源院本、簗田本、南都本
モウ	今川家本	
ユ（マか）ウ	前田家本、天正本	

②③はいずれも漢籍に基づく表現とみられ[26]、漢音が期待されるところであるが、特に「萌蘇」につい

[23] 『日本書紀』仁徳紀に見える「民萌」は、漢語出自とみられるが、諸本「オホンタカラ」と訓読するので省いた。また、『正法眼蔵』にも「朕兆未萌」「萌芽」の例があったが、悉皆的な調査は行い得なかった。今後の課題としたい。
[24] 他に、白山本・猪熊本・六地蔵寺本・享禄本・龍門文庫本・只見本を調査した。
[25] 各本の詳細については長坂（2008）を参照されたい。
[26] ②は春と司る神である「句芒」と解釈する説もあるが、『礼記』「楽記」の「然後草木茂，區萌達，羽翼奮，角觡生，蟄蟲昭蘇，……」の「区萌」（まがった芽）が出典とも考え得る。③は、注釈書では『白氏文集』巻四・新楽府・鶚九剣の「蟄虫昭蘇萌草出」が引かれるが、この「蟄虫昭蘇」も『礼記』「楽記」の当該箇所に由来する。

ては、「ホウ」とする本が多数を占める結果となった。なお、表 3 に挙げた例については、字体は全て「萠」であった。

以上のように、『和玉篇』・『色葉字平他』類の韻書といった字書や、『太平記』諸本では、類推音と思われる「ホウ」「ボウ」が多数確認された。ただ一方で、「ハウ」「バウ」「マウ」[27]等も一定数見られた。

3-4. 第三節のまとめ

本節では、中古中世の諸資料における《萌》の字音を確認した。3-1 節では、呉音資料ではマウ（上～去声）が一般的であり、室町末の一部の音義にホ（ボ）ウが現れることを確認した。3-2 節では、漢音資料では、バウは一部資料にとどまりマウ（平声）が一般的であるが、鎌倉～南北朝頃よりホウの加点例が現れ、室町時代にはマウ・ホ（ボ）ウ・ハ（バ）ウなど揺れることを確認した。このうちホ（ボ）ウは「萠」の字体の「朋」からの類推音と考えられることを論じた。3-3 節では、古辞書や日本語文資料においてもマウ・ホ（ボ）ウ・ハ（バ）ウなど揺れることを確認した。

4. 近世・近代における《萌》の字音

本節では、近世以降の《萌》の字音を問題とするが、当期ではオ段長音の開合は合流し、音韻上の区別を失っていたので、以下では、文献の用例を引く場合と仮名遣いを論じる場合を除き、モウ・ホウ・ボウのように現代仮名遣いで表記する。

4-1. 近世・近代の呉音資料における《萌》の字音

3-1 で、妙法蓮華経をはじめとする《萌》の仏典読誦音は「マウ」であることを示した。近世に入ると、『古今韻会挙要』等の韻書類を利用して、伝統的な読誦音を改変する動きが見られることが指摘されている（中澤 2013）。その種の代表的な文献である日遠『法華経随音句』（寛永二十年〈1620〉刊）では、「愍哀群萠（マウ）類文、萠（マウ）ハ、音義ニ、云二麥（ミヤク）耕ノ反一、句解ニハ莫耕ノ切文」〔化城喩品〕とあり、改変は蒙っていないが、本書の記述を引き継いで補欠した、日相『法華経音義補闕』（元禄十一年〈1698〉刊）には次のようにあり、一部の漢和辞典に見られた「ミヤウ」が現れる。

> 随音句ニ云萌ハ音義ニ曰麥耕（ミヤクキヤウ／ガウ）ノ反、句解ニハ莫耕（マクキヤウ／ガウ）切文音義句解ニ所ノレ出ス韻字ノ耕ハ漢音ハカウ呉音ハキヤウ也、今既ニミヤクキヤウノ反、マクキヤウノ反ト呼フ時ハ萌（ミヤウ）ト反ル也、皆人萌（マウ）トヨメ𠆢、マウモ漢音トオボエタリ、其ノ故ハ耕ヲ漢音ニマクカウノ反ト呼ヘハマウト反ル故也切韻ノ二字共ニ漢音ニ麥耕（バクカウ）莫耕（バクカウ）ノ反ト呼へ（まま）顕露ナル漢音也、古人羣萌（クンミヤウルイ）類ヨマレシ遺書アリ、尤モ有ル二其ノ謂レ一歟〔巻四・8 オ～ウ〕

「耕」字は法華経に現れず、呉音を「キヤウ」とする根拠は不明であり、また「遺書」も不明であるが、反切から演繹的に「ミヤウ」を導いていることが確認できる。2-2 で述べたように、呉音をミヤウとする

---

[27] このほか、延慶本『平家物語』に「萠（マウ）（去）芽（ケ）（平）」〔五末 43 ウ 5〕を確認している。

のは『磨光韻鏡』とも一致する。

しかし、「皆人萌（マウ）トヨメドモ」とあるように、実際には「マウ」も用いられ続けたものと思われる。近世中後期の写とされる佼成図書館蔵『仮名書き法華経』には、「群萌（ぐんまう）」〔影印本 p.304〕とあり、ミヤウは見えない。ただし「群萠（ぐんほう）」〔影印本 p.146〕ともあり、近世初期の法華経音義に見えた「ホ（ボ）ウ」も、実際の訓読に用いられることがあったようである。

4-2. 近世・近代の漢音資料における《萌》の字音

近世には、漢籍を享受する層が拡大し、多くの訓点本や注釈書が作成されるようになるが、音形を詳細に示す資料は限定される。また、本論ではボウとホウの差異を問題としていることもあり、なるべく清濁を区別する資料が望まれるため、そのような資料の選定はなおさら困難となる。本節では、『蒙求』注釈書、『示蒙句解』、『経典余師』の三種を取り上げる。

まず『蒙求』に登場する「逢萌」の字音の変遷を追う。

山本（2021）は、『蒙求』標題の字音を積極的に示す近世資料として、毛利貞斎注『蒙求標題大綱鈔』（1683 刊，以下「大綱鈔」）、毛利貞斎注『故事俚諺絵鈔』（1690 刊，以下「絵鈔」）、『蒙求標題俚諺鈔』（1706 刊，以下「俚諺鈔」）、宇野東山注『蒙求国字辨』（1777 刊，以下「国字辨」）、田興甫注解『補註蒙求国字解』（1778 刊，以下「国字解」）、下河辺拾水図解・吉備祥顕考訂『蒙求図会』初編（1801 刊）の 6 種を挙げている。このうち、『蒙求図会』は初編のみであり《萌》の字音は確認できなかったが、『国字辨』では「ホウ」、その他四本では「ボウ」が確認され、中世までに見られたモウは一例もなかった。

近代の島崎磯之丞解『訓蒙蒙求国字解』（1881 刊）では「ホウ」だが、当該資料は濁点が散発的で清濁ははっきりしない。塚本哲三編『有朋堂文庫漢文双書　蒙求全』（1928 刊）では「ばう」である。しかし、早川光三郎『新釈漢文大系 58』（1973 刊）では「はう」となっている。

続いて、『孟子』に見える「萌蘖」と、『近思録』に見える「萌動」の、二語の字音の変遷を追う。

近世漢学所用の漢字音の位相的な在り方を論じた松井（1971）は、その中心的資料として、朱子学の初等教科書『小学』の注釈書である中村惕斎『小学示蒙句解』（1690 年序）を取り上げている。本書には、漢字に対する濁点や不濁点（清音符号）が豊富に用いられており、「濁点の加点は当時の出版物としては綿密なほうである」（松井 1971: 31）と判断されている。この特徴は、同じく中村惕斎による『四書示蒙句解』（1701 序，1719 刊）や『近思録示蒙句解』（1701 序，刊年不明）にも当てはまるものと思われるので、この二書を調査する。

また松井（1971）では、『小学示蒙句解』の訓読文を『経典余師　小学之部』（1791 刊）と比較し、後者の方がより通俗的な字音を用いていることを述べる。『経典余師』は、鳥取藩に仕えた渓百年（1754-1831）が著した、本文と平易な注釈に加え上欄に書き下し文を示すスタイルによる、漢籍の素読の自習を目的とする注釈書であり、近世後期に大いに流行した。天明六年（1786）の『四書之部』を嚆矢とし、様々な部が発刊された。その諸本については鈴木（2007）に詳しく、『四書之部』については五回の改版がなされたという。濁点は必ずしも義務的とはいえないが、綿密に施されている。なお本調査では、初版、三版、五版を調査したが、改版により濁点の有無が変動する箇所のあることが確かめられた。

これらに加えて、濁音に必ず濁点を付す近代の注釈書として『有朋堂文庫』と『新釈漢文大系』の振り

仮名も調査した。以下に推移を示す。

・『孟子』告子上「萌蘖」
バウ（四書示蒙句解 1719）→ほう（経典余師四書之部初版 1786）→ほう（三版 1824）→ほう（五版 1852）→ばう（有朋堂文庫 四書全 1927）→ほう（新釈漢文大系 1962）
・『近思録』巻五・克己「萌動」
バウ（近思録示蒙句解）→はう（経典余師近思録之部初版 1843）→はう（有朋堂文庫 1928）→はう（新釈漢文大系 1975）

『経典余師』の音形は、確実ではないものの、清音であった可能性もあると思われる。現代の注釈書では清音ホウが用いられている。以上から、近世の漢籍訓読において、《萌》の伝統的漢音であるモウ（マウ）の使用は廃れ、ボウあるいはホウが用いられるようになるといえる。

4-3. 近世の辞書・非漢文資料における《萌》の字音

『書言字考節用集』『節用集大全』などには、依然として《萌》字を含む熟語は見られないようである。

音訓を示した漢字字書の類は枚挙に暇が無いが、まず『玉篇』の初期の和刻本である寛永八年（1631）刊の『大広益会玉篇』を確認すると、巻十三「萌」の右傍に「バウ」、左傍に「マウ」とみえる。毛利貞斎『増続大広益会玉篇大全』（元禄五年〈1692〉刊本）でも同様である。これに対し、承応二年（1652）刊の『字集便覧』では「バウ」のみである。

非漢文資料については、3-3 節で取り上げた『神皇正統記』と『太平記』の写本・版本を確認する。

『神皇正統記』は、江戸時代の版行としては、慶安二年（1649）と慶応二年の『評註校訂神皇正統記』があるのみである。3-3 節で見た通り、青蓮院本では「ミマウ」の傍訓が見えたが、慶安二年版本では「みぼう」、『評註校訂神皇正統記』では「みほう」とある。後者は比較的濁点を多く用いる本であり、清音のホウであった可能性がある。

『太平記』については、いわゆる流布本のうち、仮名書きの写本については土井本と河野美術館四十二冊本（河野本）を調査し、整版本については、日東寺（1994）を参考にし、元和八年（1622）、万治三年（1660）、寛文十一年（1671）、延宝八年（1680）、元禄十年（1697）の刊本を調査した。その結果、「萌蘇」は全ての本でホウソであったが、「勾萌」は土井本が「こうほう」、河野本が「こうばう」、元和八年本以下の版本は全て「コウマウ」であった。

はなはだ粗略な調べではあるが、モウも散見されるものの、ホウ・ボウが標準的な字音となっているように思われる。『和玉篇』の一部の本に見られたような、モウのみを掲げる字書類は見られなかった。

4-4. 近代の辞書における《萌》の字音

まず、明治初期の漢語辞書から確認する[28]。「後続の漢語辞書の内容に多大な影響を与えた」（松井 1990:180）とされる『漢語字類』（1869 刊）では、「萌兆（はうてう）」「一牙（はうが）」「一蘖（はうがつ）」の三語が並ぶ。この三語は、

[28] 以下の記述は、『明治期漢語辞書大系』の解題を参考にした。

本書を増補して成立したとされる『大全漢語解』（1871 刊）にもそのまま受け継がれるが、字体が「萠」に変じる。『大全漢語解』の増補とみられる『大増補漢語解大全』（1874 刊）では「一（萠）生」が加わる。いずれも濁点が無いことが注意される。

ここで『和英語林集成』における《萌》を含む漢語を確認すると、三版（1886 刊）に「Hōɢa ハウガ 萌芽」「Mihō ミハウ 未萌」の二語が見える。ボウ・モウの音は見えないようである。

高橋五郎『漢英対照いろは辞典』（1888 刊）では、「萠發（はうはつ）」「萠芽（はうが／ほうが）」「萠黄（はうくわう）」「萠蘖（はうけつ）」「萠兆（はうてう）」「萠生（はうせい）」「端萠（たんはう）」「欝萠草（うつはうさう）」「未萠（みはう／びばう）」の 9 語が見え、「未萠」のみにボウの音が現れる。

しかし、後出の『言海』・『日本大辞書』といった近代国語辞書では、「萠芽（はうが）」しか立項されていない。『大言海』では「萌蘖（はうげつ）」が加わるが、『和英語林集成』に見えた「未萌」は見えない。「未萌」は早くに廃れ、一般に広く使われ続けた漢語は「萌芽（ホウガ）」のみであったと思われる[29]。

以上から、近代の漢語において一般的に用いられた音は、清音のホウであったことがわかる。

4-5. 第四節のまとめ

4-1 節では、法華経字音学においてミョウ（ミャウ）という呉音形が導かれることもあったが、呉音のモウ（マウ）も用いられ続けていることを確認した。4-2 節では、近世の漢籍訓読では、前代までに一般的であったモウ（マウ）が、ほとんど用いられず、ホウ（ハウ）・ボウ（バウ）が多く使用されるようになることを確認した。4-3 節では、辞書や非漢文資料においてもモウ（マウ）の使用が減じていることを確認した。4-4 節では、近代の漢語では、清音のホウが一般に用いられたことを確認した。

5. 《萌》の字音変化の背景

5-1. モウが使用されなくなる背景

前節で、近世以降、漢籍や非漢文資料におけるモウ（マウ）の使用が減じることを確認した。その背景については、一つには常用字体であった「萠」の「朋」からの類推によるホ（ボ）ウが広まり、モウを淘汰したことが考えられるが、他の要因も考えられる。

ここで注目したいのが、近世『蒙求』注釈書の漢字音の変遷である。今、『蒙求』標題に現れる、撥音韻尾を有する明母・微母字のうち伝統的な蒙求読誦音がマ行はじまりであった字について、4-2 に挙げた注釈書（うち大綱鈔・絵鈔・俚諺鈔はともに毛利貞斎の著）の字音を示すと、表 4 のようになる。

表 4　近世『蒙求』注釈書の漢字音の変遷

字	標題	声母	摂	伝統蒙求音	大綱鈔 1683	絵鈔 1690	俚諺鈔 1706	国字辨 1777	国字解 1778
孟	劇孟一敵	明	梗	マウ	バウ	マウ	マウ／バウ		モウ

[29] 「日本語歴史コーパス」で語彙素を「%萌%」、語種を「漢」に指定して検索したところ、「萌芽」が 80 例、「未萌」が 6 例、「萌動」「萌発」が各 1 例（いずれも 1874 年『明六雑誌』）で、「未萌」は 1901 年の『太陽』2 例が最新の用例であるのに対し、「萌芽」は 1901～1925 年に合計 53 例見られた。

孟	孟軻養素	明	梗	マウ	ハウ	マウ	バウ／マウ		モウ
孟	孟宗寄鮓	明	梗	マウ	バウ	マウ	マウ		モウ
孟	孟光荊釵	明	梗	マウ	ハウ	マウ	マウ		モウ
孟	趙孟疵面	明	梗	マウ	バウ	マウ	バウ／マウ		モウ
孟	孟陽擲瓦	明	梗	マウ	バウ	マウ	バウ		モウ
孟	孟嘉落帽	明	梗	マウ	バウ	マウ	バウ／マウ		モウ
孟	孟嘗還珠	明	梗	マウ	ハウ	マウ	マウ		モウ
満	韋賢満籯	明	山	マン	バン	バン	バン		マン
満	孔融坐満	明	山	マン	バン	バン	バン		マン
曼	曼容自免	微	山	マン	バン	バン	バン／マン	バン	マン
曼	曼倩三冬	微	山	マン	バン	ハン	バン／マン		マン
面	趙孟疵面	明	山	メン	ベン	メン	ベン		メン
湎	玄石沈湎	明	山	メン	ベン	ベン	ベン	ベン	メン
蒙	蒙恬製筆	明	通	モウ	ボウ	モウ	バウ／マウ		モウ
濛	王濛市帽	明	通	モウ	ボウ	ボウ	ボウ		モウ
萌	逢萌挂冠	明	梗	マウ	ボウ	ボウ	ボウ	ホウ	ボウ
門	于公高門	明	山	モン	ボン	モン	モン		モン
門	張昭塞門	明	山	モン	ボン	モン	モン		モン
門	魏勃掃門	明	山	モン	ボン	モン	モン	モン	モン
門	西門投巫	明	山	モン	ボン	モン	モン		モン
門	鄭崇門雑	明	山	モン	ボン	モン	モン		モン
命	嵇呂命駕	明	梗	メイ	メイ	メイ	メイ	メイ	メイ
明	孔明臥龍	明	梗	メイ	メイ	メイ	メイ		メイ
明	離婁明目	明	梗	メイ	メイ	メイ	メイ		メイ
明	淵明把菊	明	梗	メイ	メイ	メイ	メイ		ノ(メ?)イ
明	慈明八龍	明	梗	メイ	メイ	メイ	メイ		メイ
鳴	鳴鶴日下	明	梗	メイ	ベイ	メイ	メイ／ベイ	メイ	メイ
鳴	稚珪蛙鳴	明	梗	メイ	ベイ	メイ	ベイ	メイ	メイ

表 4 より、次のようなことが看取される。

・『大綱鈔』では、「明」「命」を除いて、明母字を一律にバ行としている。

・『絵鈔』では、「満」「曼」「湎」「濛」「萌」はバ行だが、他はマ行となっている。

・『俚諺鈔』は、『大綱鈔』と『絵鈔』の中間的な性格を有し、バ行マ行両形を記す例もある。

・『国字辨』では、「曼」「湎」「萌」をバ行とし、他はマ行あるいは付訓なし。

・『国字解』では、「萌」以外全てマ行となっており、伝統読誦音に回帰している。

『大綱鈔』では、流通している漢字音（以下「流通音」）に従わず、マ行始まりの音をバ行に改変していることが明らかである。この例外となる「明」「命」は、いずれも呉音と漢音が頭子音以外でも異なり、

かつ呉音形（ミョウ）も広く流通していたと考えられる。裏を返せば、流通音がマ行音の場合、呉音的と判断し、人為的にバ行始まりの漢音を作り出して用いたのではないかと想像される。

それに対して『絵鈔』は、蒙求故事にちなむ挿絵が印刷されており、『大綱鈔』に比べ童蒙教育的性格が濃い。このゆえに、流通音をそのまま用いたのではないかと思われる。しかし例外的にバ行を用いた漢字が 5 つあり、うち「満」以外の「曼」「湎」「萌」「濛」4 字は、日常ではあまり使用されない漢字といえよう。『国字辨』でも、依然として「曼」「湎」「萌」3 字にバ行が用いられている。

以上から考察すると、「曼」「湎」「萌」のような、特に使用頻度の低い字においては、撥音韻尾字か否かに関わらず、呉音―マ行・漢音―バ行という字音体系の規範意識に基づき、バ行始まりの音を漢籍で用いることが好まれたのではないかと思われる[30]。近世の漢籍において《萌》にボウが頻用されるようになる理由は、この意識によるところが大きいのではないかと考える。

5-2. ボウが使用されなくなる背景

4-2 節で、近世の漢籍で《萌》をボウと読む例が少なからず見られた。しかし 4-4 節で、近代漢語辞書・国語辞書では、漢語を清音でホウと読む例の多いことが確認された。

この背景としては、《萌》は近代以降も引き続き「萠」と書かれたり、また印刷されたりすることが多く、時代を通じて「朋」の字音からの類推を受け続けたが、「朋」字にはボウ・ホウの二音からホウに一元化するという流れがあったため、それが「萌」字にも反映されたものと解釈する。

『明朝体活字字形一覧 1820～1946 年』によれば、築地五号（1894 年）などに「萠」、築地三号（1912 年）などに「萌」という活字字形が見える。実際、『言海』には「萠」が、『日本大辞書』には「萌」が用いられている。「萌」とは別に、『康熙字典』未掲載である「萠」の活字が必要だったのは、近代以降も手書きにおいては「萠」が一般的な字体だったからではないかと思われる[31]。

続いて、「朋」字におけるホウへの一元化の流れを確認する。

『日葡辞書』では、「朋」を含む熟語として Bôyŭ・Fôyŭ（朋友）と、Dôbô（同朋）が確認される。「朋友」の語形は中世古辞書にも揺れが認められ、易林本『節用集』は「ホウイウ」、元亀二年本『運歩色葉集』は「ホウユウ」であるが、明応五年本『節用集』・静嘉堂文庫本『運歩色葉集』等には「ボウユウ」とあり、また『伊京集』には「ボウウ」とある。「同朋」は、現代では「同朋衆」などを除きドウホウと読むのが一般的になっている。また、近世後期頃には「傍輩」を「朋輩」と表記した例が現れるが[32]、『日本国語大辞典』では「当て字」とされている。オ段長音の開合の合流と、「傍」の清音形ホウが一般的でなくなったことによって出現した表記と考えられるが、その前提としては「朋」の清音形ホウが一般化していたことが想定される。

---

[30] 泥母でも同様であるのか、また他の資料でも同様の傾向が認められるのかについての検討は今後の課題としたい。

[31] なお「萠」は、JIS 第 2 水準に収録されており、平成 16 年には人名用漢字に追加された。

[32] 『日本語歴史コーパス』上での初例は人情本『明烏後の正夢』で、二編（1822 刊）では「傍輩」表記だが五編（1824 刊）では「朋輩」表記となっている。

また「朋」を構成要素とする「崩」[33]は、「朋」と異なり幇母であり、演繹的には呉音漢音ともにホウが期待される。実際に保延本『法華経単字』では「北（入）東（去）反」の反切が施されており、清音ホウと認められる。しかし、至徳版『法華経音訓』では去濁点が施されている。『日葡辞書』には、Fôguio（崩御）の他に、Bôrô（崩漏）・Bôqei（崩傾）の二語が掲げられる。この二語は『太平記』に見られ、濁音の「ぼう」も土井本に裏付けられる。また、国会図書館蔵『玉塵抄』巻五には「天子ニ崩（スム、ホウ）云イ諸侯ニ薨（コウ）云イ」〔15 ウ〕という清音（スム）注記の例があることも、当時濁って読まれることがあった証拠となる。このほか、「棚」字にも、『色葉字平他』の明応十年本や龍門文庫本には「ボウ」の音形が確認される。

なお、呉音・漢音が清濁のみで対立する字の場合、濁音形（呉音）が残りやすいという傾向が指摘されており（松井 1971）、漢音資料でも時代が降るにつれこの種の濁音形の混入が増えることが明らかにされている（佐々木 2009 第三部第四章）。しかし、「朋」（ホウ・ボウ→ホウ）についてはこの傾向に反するものとなる。この理由は詳らかでないが、例えば「朋友」という語は、『論語』に 8 例みえ、五倫の一つに数えられる儒教の基本単語であったため、近世寺子屋教育などを通じて、漢音形のホウユウがボウユウを淘汰しことなどが考えられるかもしれない。

6. 結論と課題

本稿では、以下の点を明らかにした。

・《萌》は、中古中世の訓点資料から帰納する限りでは、呉音漢音ともにマウが一般的で、声調において対立していたとみられる。
・慣用音「ホウ」は、「萠」の字体の「朋」からの類推音であり、室町頃には一般的な字音であったと見られる。また「朋」の呉音に由来するとみられるボウも生じていたとみられる。
・近世に入るとマウはほとんど用いられなくなり、漢籍訓読ではホウかボウが用いられる。その理由として、常用字でない場合は、漢音は一律にバ行で揃えられる動きがあったのではないかと考察した。
・近代の漢語に用いる音としては、清音のホウが一般的であった。その理由については、「朋」字に起こった一元化（ボウ・ホウ→ホウへ）に連れ立ったものと解釈した。

明母や泥母といったいわゆる次濁字において、清音の慣用音が生じた字は他にも多く存する。個別の分析を重ねるとともに、どの程度一般化可能か考察を深めていくことが課題である。

7. 文献リスト

7-1. 参考文献

・有坂秀世（1940）「メイ（明）ネイ（寧）の類は果して漢音ならざるか」『音声学協会会報』64, 7-9.
・石山裕慈（2021）「浄土三部経音義の漢字音」『訓点語と訓点資料』146, 48-60.
・伊藤智弘（2020）「「字鏡集」の字音掲載方針について」『訓点語と訓点資料』145, 左 37-59.

[33] 「崩」字と《萌》を混同したとおぼしき例が時折確認された。例えば『御堂関白記』寛弘八年六月廿二日の記事では「巳時崩給」の「崩」が「萠」と書かれている。また、『四書画引』（元禄六年〈1693〉刊）において、「萠」に「分ー」という注がある〔21 オ〕が、『論語』季氏篇の「邦分崩離析」が誤って引かれたものである。

・大島英之（2022）「『色葉字平他』類の韻書における漢字音―大東急記念文庫本・龍門文庫本を例に―」『日本語学論集』18, 236(1)-211(26).
・小倉肇（1995）『日本呉音の研究』新典社.
・小林芳規（1967）『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』東京大学出版会.
・佐々木勇（2009）『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』汲古書院.
・佐々木勇（2012）「親鸞使用の声点加点形式について―坂東本『教行信証』声点の位置づけ―」『訓点語と訓点資料』129, 1-18.
・鈴木俊幸（2007）『江戸の読書熱 自学する読者と書籍流通』平凡社
・築島裕（1967）『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 研究篇』東京大学出版会.
・築島裕（1969）『平安時代語新論』東京大学出版会.
・築島裕（1986）「高山寺蔵大毗盧遮那成佛經疏永保點解説」『高山寺古訓点資料第三』東京大学出版会. 3-22.
・築島裕（2008）「国語史学より見た弘法大師」『弘法大師墨蹟聚集 論文篇』弘法大師墨蹟聚集刊行会. 323-338.
・長坂成行（2008）『伝存太平記写本総覧』和泉書院.
・中澤信幸（2013）『中近世日本における韻書受容の研究』おうふう.
・日東寺慶治（1994）「太平記整版の研究」『太平記とその周辺』新典社. 473-500.
・平山久雄（1993）「中国語における音韻変化規則の例外―それを生み出す諸原因について―」『東方学』85, 140(1)-127(14).
・平山久雄（2022）『中古音講義』汲古書院.
・松井利彦（1971）「近世漢学における漢字音の位相」『国語国文』40(5), 1-33.
・松井利彦（1990）『近代漢語辞書の成立と展開』笠間書院.
・山本嘉孝（2021）「近世日本における『蒙求』の音声化―漢字音と連続性―」『古典は遺産か？ 日本文学におけるテクスト遺産の利用と再創造（アジア遊学 261）』勉誠出版. 143-158.
・文化庁文化部国語課（1999）『明朝体活字字形一覧 1820～1946 年』大蔵省印刷局

7-2. 引用資料

※影印本については、出版社名と刊年のみを記した。また表 1 に示した漢和辞典類は全て省略した。
※以下に挿入したリンク先は、いずれも 2022 年 10 月 19 日最終閲覧。

中国資料

・切三・王二：『十韻彙編』1963. 臺灣学生書局.
・王三：周祖謨（編）（1983）『唐五代韻書集存』中華書局.
・広韻：余廼永（校注）（2000）『新校互註宋本広韻』上海辞書出版社.
・集韻：『集韻 附索引』1985. 上海古籍出版社.
・宋本玉篇：宮内庁書陵部蔵南宋本（宮内庁書陵部漢籍集覧公開画像）
・一切経音義：【玄応音義】『古辞書音義集成 七～九』1980-81. 汲古書院.【慧琳音義】SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース
・経典釈文：【抱経堂本】早稲田大学古典籍総合データベース公開画像【通志堂本】『語言文字学叢刊 経

典釈文』1975. 鼎文書局.
・干禄字書：杉本つとむ（1972）『漢字入門 『干禄字書』とその考察』早稲田大学出版部.

日本辞書・音義・近世以前漢字音研究書

・篆隷万象名義：『高山寺古辞書資料第一』1977. 東京大学出版会.
・新撰字鏡（天治本）：『新撰字鏡天治本 附 享和本・群書類従本』1967. 臨川書店.
・法華経釈文（醍醐寺本）：『古辞書音義集成 4』1979. 汲古書院.
・法華経音義：【九条家本法華経音】『法華経音』1936. 古典保存会.【保延本法華経単字】『法華経単字』1933. 貴重図書影本刊行会.【至徳版法華経音訓】『法華経音訓』1931. 貴重図書影本刊行会.
・類聚名義抄（観智院本）：『新天理図書館善本叢書 9-11』2018. 八木書店.
・色葉字類抄（前田本）：『尊経閣善本影印集成 18』1999. 八木書店.
・字鏡集：【天文本】『字鏡鈔天文本 影印篇』1982. 勉誠社.【永正本】『古辞書叢刊 字鏡抄 七帖』1974. 雄松堂書店.【応永本】『尊経閣善本影印集成 21-23』1999-2001. 八木書店.
・和玉篇：【音訓篇立】『古辞書音義集成 15』1981. 汲古書院.【夢梅本・篇目次第】『倭玉篇 夢梅本 篇目次第 研究並びに総合索引』1976. 勉誠社.【玉篇略】『古辞書叢刊 玉篇略 三冊』1976. 雄松堂書店.【玉篇要略集】『古辞書叢刊 和玉篇 一冊』1976. 雄松堂書店.【松井本類字韻】『増補古辞書叢刊 類字韻（附）初字通韻』1978. 雄松堂書店.【弘治二年本】『増補古辞書叢刊 倭玉篇 三冊』1978. 雄松堂書店.【米沢本】米沢善本完全デジタルライブラリー公開画像【拾篇目集】国会図書館デジタルコレクション公開画像
・色葉字平他類の韻書：【明応十年本】『大東急記念文庫善本叢刊 中古中世編 14』2016. 汲古書院.【天正十六本・祐徳稲荷神社本】『古辞書研究資料叢刊 3』1995. 大空社.【龍門文庫本】『龍門文庫善本叢刊 3』1985. 勉誠社.【新韻集】『新韻集』1944. 日本古典全集刊行會.
・古本節用集：【文明本】国立国会図書館デジタルコレクション公開画像【伊京集・明応五年本・易林本】『改訂新版 古本節用集六種研究並びに総合索引』1979. 勉誠社.
・運歩色葉集：【元亀二年本】京都大学貴重資料デジタルアーカイブ公開画像【静嘉堂文庫】『中世古辞書四種研究並びに総合索引』1971. 風間書房.
・日葡辞書：土井忠生・森田武・長南実（編訳）（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店.
・落葉集：小島幸枝（編）（1978）『耶蘇会板落葉集総索引』笠間書院.
・大広益会玉篇（付訓，寛永八年本）：神戸大学附属図書館蔵本（新日本古典籍総合データベース公開画像）
・増続大広益会玉篇大全（元禄五年本）：早稲田大学蔵本（早稲田大学古典籍総合データベース公開画像）
・字集便覧：東京都立中央図書館蔵本（新日本古典籍総合データベース公開画像）
・四書画引：米谷隆史（2016）「〈資料紹介〉元禄六年刊『四書画引』」『国語文字史の研究 15』和泉書院. 207-232.
・浄土三部経音義：【龍谷大学蔵本】龍谷蔵公開画像【珠光編】『勉誠社文庫 30』1978. 勉誠社.
・法華経随音句：『日遠著法華経随音句』1971. 勉誠社.
・法華経音義補闕：兜木正亨（1972）『法華音義類聚 坤』本満寺.
・書言字考節用集：『書言字考節用集研究並びに索引 影印篇』1973. 風間書房.
・節用集大全：『恵空編節用集大全 研究並びに総合索引』1975. 勉誠社.

・磨光韻鏡：日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵]公開画像
・漢呉音図：日本語史研究資料 [国立国語研究所蔵]公開画像
・隋唐音図：『勉誠社文庫 42』1978. 勉誠社.
・漢語字類：『明治期漢語辞書大系 2』1995. 大空社.
・大全漢語解：『明治期漢語辞書大系 6』1995. 大空社.
・大増補漢語解大全：『明治期漢語辞書大系 12-13』1995. 大空社.
・和英語林集成（三版）：明治学院大学和英語林集成デジタルアーカイブス公開画像
・漢英対照いろは辞典：『明治期国語辞書大系 普 2』1997. 大空社.
・日本辞書言海：『明治期国語辞書大系 普 5』1998. 大空社.
・日本大辞書：『明治期国語辞書大系 普 6』1998. 大空社.
・大言海：『新編 大言海』1982. 冨山房.

訓点資料・漢文注釈書

・大日経疏（高山寺本）:『高山寺古訓点資料 3』1986. 東京大学出版会.
・仮名書き法華経：【足利本】『足利本仮名書法華経 影印篇』1974. 勉誠社.【妙一記念館本】『妙一記念館本仮名書き法華経 影印篇 上下』1988. 霊友会.【佼成図書館蔵本】田島毓堂（編）（1998）『佼成図書館蔵法華経和歌付き仮名書き法華経の研究 影印篇』右文書院.
・教行信証（板東本）:『増補親鸞聖人真蹟集成 1・2』2005. 法蔵館.
・大慈恩寺三蔵法師伝：【興福寺本】築島裕（1965）『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 訳文篇』東京大学出版会.【人文研本】東方學デジタル圖書館公開画像
・孟子：【書陵部蔵集註本】宮内庁書陵部蔵収蔵漢籍集覧公開画像【京都大学附属図書館蔵宣賢加点本】京都大学貴重資料デジタルアーカイブ公開画像【東洋文庫蔵有注本】岩崎文庫善本画像データベース公開画像【東洋文庫無注永禄十年写本】岩崎文庫善本画像データベース公開画像【龍谷大学蔵集註大全】龍谷蔵公開画像
・史記（高山寺本）:『高山寺古訓点資料第一』1980. 東京大学出版会.
・臣軌（書陵部本）：宮内庁書陵部蔵収蔵漢籍集覧公開画像
・六韜：【陽明文庫蔵天文写本】国文学研究資料館マイクロフィルム（55-900-5）【慶應大学蔵室町後期写本】慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション公開画像【京都大学附属図書館蔵業賢筆本】京都大学貴重資料デジタルアーカイブ公開画像
・蒙求（無注本）:【長承本】『長承本 蒙求』1990. 汲古書院.【正倉院本】『蒙求』1929. 竹柏会.【龍谷大学本】龍谷蔵公開画像
・蒙求（有注本）:【故宮博物館本】池田利夫（編）（1988）『蒙求古註集成 上』汲古書院.【応安刊本】国会図書館デジタルコレクション公開画像【大永本】国会図書館デジタルコレクション公開画像【南葵文庫本】東京大学附属図書館コレクション公開画像【京都大学附属図書館蔵天正八年本】京都大学貴重資料デジタルアーカイブ公開画像【京都大学附属図書館蔵徐注本】京都大学貴重資料デジタルアーカイブ公開画像
・白氏文集：【嘉禎本】『金沢文庫本白氏文集 巻五十四 六十二 六十三 六十五 六十八 附四』1984. 勉誠社.【正応本】『天理図書館善本叢書漢籍之部 2』1980. 八木書店.
・五行大義（穂久邇文庫本）:『古典研究会叢書漢籍之部 7-8』1989-90. 汲古書院.

・群書治要（書陵部本）：宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧公開画像
・老子道徳経：【応安本】e 国宝公開画像【至徳本】宮内庁書陵部蔵収蔵漢籍集覧公開画像
・三教指帰：【仁平四年本】太田次男（1989）「聾瞽指帰と三教指帰―付・天理図書館蔵仁平四年写本の翻字―」『成田山仏教研究所紀要』12. 69-94.【光明院本】高野山アーカイブ公開画像【龍門文庫本】阪本龍門文庫電子画像集公開画像
・文鏡秘府論：【書陵部本】『文鏡秘府論』1930. 東方文化叢書.【成簣堂文庫本】『文鏡秘府論』1935. 古典保存会.
・秘密曼荼羅十住心論（高山寺本）：『高山寺古訓点資料第四』2003. 東京大学出版会.
・秘蔵宝鑰：【西教寺本】曾田文雄・岸岡民子（1970）「西教寺本秘蔵宝鑰併解読文（上）」『訓点語と訓点資料』42.【国語研究室本】『東京大学国語研究室資料叢書 16 古訓点資料集二』1986. 汲古書院.
・本朝文粋（久遠寺本）：『重要文化財 本朝文粋 上下』1980. 汲古書院.
・管蠡抄：【金沢文庫本】納富常夫（1973）「金沢貞顕筆「管蠡抄」」『金沢文庫研究』19(9･10).【国会図書館本】国立国会図書館デジタルコレクション公開画像
・蒙求標題大綱鈔：宮城県図書館蔵天和三年刊本（「叡智の杜 Web」公開画像）
・故事俚諺絵鈔：東京大学総合図書館蔵元禄三年刊本（請求記号 H30/400，原本調査）
・蒙求標題俚諺鈔：一橋大学附属図書館青木文庫蔵宝永三年刊本（新日本古典籍総合データベース公開画像）
・新刻蒙求国字辨：東京都立中央図書館加賀文庫蔵安永六年刊本（請求記号加 02043，原本調査）
・補註蒙求国字解：東京大学総合図書館蔵寛政元年補闕刊本（請求記号 H30/399，原本調査）
・蒙求図会：高知県立高知城歴史博物館山内文庫蔵享和元年刊本（新日本古典籍総合データベース公開画像）
・四書示蒙句解：内閣文庫蔵享保四年刊本（国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像）
・近思録示蒙句解：関西大学蔵本（関西大学東アジアデジタルアーカイブ公開画像）
・経典余師四書之部：【初版】内閣文庫蔵天明六年刊本（国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像）【三版】高知県立高知城歴史博物館山内文庫蔵文政七年刊本（新日本古典籍総合データベース公開画像）【五版】国立国会図書館蔵嘉永五年刊本（国会図書館デジタルコレクション公開画像）
・経典余師近思録之部：内閣文庫蔵天保十四年刊本（国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像）
・訓蒙蒙求国字解：国立国会図書館蔵本（国立国会図書館デジタルコレクション公開画像）
・塚本哲三（編）（1927）『漢文叢書　四書全』有朋堂書店.
・塚本哲三（編）（1928）『漢文叢書　蒙求全』有朋堂書店.
・塚本哲三（編）（1928）『漢文叢書　近思録全・伝習録全』有朋堂書店.
・内野熊一郎（1962）『新釈漢文大系 孟子』明治書院.
・早川光三郎（1973）『新釈漢文大系 蒙求（上）』明治書院.
・市川安司（1975）『新釈漢文大系 近思録』明治書院.

非漢文資料

・御堂関白記：『陽明叢書記録文書篇 第 2 輯』1983. 思文閣出版.
・三教指帰注集：『三教指帰注集』1992. 大谷大学.
・源氏奥入：『奥入 大橋家本』1971. 日本古典文学刊行会.

・尊号真像銘文（広本・略本）:『増補親鸞聖人真蹟集成 4』2006. 法蔵館.
・平家物語（延慶本）:『大東急記念文庫善本叢刊 中古中世編 別巻 1』2006-2008. 汲古書院.
・神皇正統記：【白山本】『神皇正統記 一～四』1933. 三秀舎.【猪熊本】國學院大学デジタルライブラリー公開画像【六地蔵寺本】『六地蔵寺本神皇正統記』1997. 汲古書院.【青蓮院本・享禄本】『天理図書館善本叢書 19 神皇正統記諸本集』1975. 八木書店.【龍門文庫本】阪本龍門文庫電子画像集公開画像【只見本】『神皇正統記只見本 カラー影印・簡訳・解説』2020. 福島県只見町教育委員会.【慶安二年版本】国文学研究資料館蔵本（新日本古典籍総合データベース公開画像）
・評註校訂神皇正統記：国文学研究資料館蔵本（新日本古典籍総合データベース公開画像）
・太平記（古態本）:【神田本】『神田本太平記』1972. 汲古書院.【西源院本】鷲尾順敬（校訂）（1936）『西源院本太平記』刀江書院.【神宮徴古館本】国文学研究資料館紙焼写真（E1996）【玄玖本】『玄玖本太平記 一～五』1973-75. 勉誠社【簗田本】国立国会図書館デジタルコレクション公開画像【筑波大学本】新日本古典籍総合データベース公開画像【南都本】国文学研究資料館紙焼写真（E612）【今川家本】国文学研究資料館マイクロフィルム（55-168-2-1）【米沢本】米沢善本完全デジタルライブラリー公開画像【毛利家本】国文学研究資料館紙焼写真（E611）【益田本】國學院大学図書館デジタルライブラリー公開画像【前田家本】東京大学史料編纂所蔵謄写本（請求記号 2040.4-40）【神宮文庫本】国文学研究資料館マイクロフィルム（34-339-2）【梵舜本】『太平記 梵舜本 一～九』1965-67. 古典文庫.【天正本】国文学研究資料館紙焼写真（E1436）【教運本】国立国会図書館デジタルコレクション公開画像【野尻本】国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像【京大本】小秋元段ほか（編）（2011）『校訂京大本太平記 上下』勉誠出版.【日置本】『中京大学図書館蔵 太平記 一～四』1990. 新典社.
・太平記（流布本）:【土井本】西端幸雄・志甫由紀恵（編）（1997）『土井本『太平記』本文と語彙データ』勉誠社.【河野美術館四十二冊本】国文学研究資料館マイクロフィルム（73-196-2）【元和八年版】内閣文庫蔵本（国立公文書館デジタルアーカイブ公開画像）【万治三年版】岐阜市立図書館蔵本（新日本古典籍総合データベース公開画像）【寛文十一年版】国文学研究資料館蔵本（新日本古典籍総合データベース公開画像）【延宝八年版】韓国国立中央図書館蔵本（新日本古典籍総合データベース公開画像）【元禄十年版】お茶の水女子大学図書館蔵本（新日本古典籍総合データベース公開画像）
・玉塵抄（国会本）：国立国会図書館デジタルコレクション公開画像

7-3. 使用した索引・データベース

・上田正（1987）『慧琳反切総覧』汲古書院
・周法高（1968）『玄応反切字表』崇基書店
・當山日出夫（1988）『和漢朗詠集漢字索引』勉誠社
・當山日出夫（1989）『新撰朗詠集漢字索引』勉誠社
・藤井俊博（1997）『本朝文粋漢字索引』おうふう
・北恭昭（編）（1994-95）『倭玉篇五本和訓集成』汲古書院.
・J.C.ヘボン（著）・飛田良文・李漢燮（編集）（2001）『和英語林集成 初版再版三版対照総索引 第 1～3 巻』港の人.
・加藤大鶴・佐々木勇・石山裕慈・高田智和（2021）「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」https://www2.mmc.atomi.ac.jp/~katou/KanjionDB/index.html

・豊島正之（2016-22）「日本近代辞書・字書集」https://joao-roiz.jp/JPDICT/
・株式会社ネットアドバンス「ジャパンナレッジ Lib」https://japanknowledge.com/library/
・国文学研究資料館「日本古典文学大系本文データベース」http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/
・国立国語研究所（2022）「日本語歴史コーパス」（バージョン 2022.3，中納言バージョン 2.6.1）https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/
・大蔵経テキストデータベース委員会「SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース」（2018 版）http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/
・愛如生「中国基本古籍庫」（V7.0）http://server.wenzibase.com/
・中央研究院・歴史語言研究所「漢籍電子文献資料庫」https://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm

8. 付記

用例のリストは、下記リンク先（Google スプレッドシート）で公開しております。

https://docs.google.com/spreadsheets/d/1LtlJcT1oAq-rkBhMfbo8OXg9pQ0HBWitEIIZh8EU5Vc/edit?usp=sharing